

「瀋陽の事件」以来、北朝鮮の悲惨な状況が浮き彫りになっています。同国を「悪の枢軸国」と断じた米国、中間選挙の前、即ち8月~9月に攻撃をかける説が専らです。が、今はコンピュータ戦争の時代、北朝鮮がサイバー攻撃で先制をかけた成功すれば、米国の圧倒的優位は難しい。果たして「第二次朝鮮動乱」は起こるのか？ 予断を許さぬ状況であることは確かでしょう。

- * 「瀋陽の事件」は奇妙な点が多い。 隣家の2階でカメラ（プロ）が予め待機していた。最も入り難いとされていた日本大使館を選んでいる。あの5人は誰かが駆け込ませたのだ。そして、同じ日に日本でも新幹線に猟銃が打ち込まれた。これらは或るシグナルではないか。その謎を解く鍵は、今秋にも予想される「米・朝軍事衝突」だ。
- * 97年12月1日の西日本新聞にこんな記事が載った「朝鮮半島有事の際、米・韓軍の死傷者を12万人と想定、うち重傷米兵1,000人の手術や治療が日本でできるよう要請した」。今国会で通す「有事法制」は、まさに医療支援を含む米国側の強い要請なのだ。そのためブッシュは「経済・金融問題の小泉失政にはこの際、目をつぶろう！」。
- * 9.11テロの犯人が一人もいないアフガンを米国が攻撃した。「ビンラディンが潜んでいるから」というほかにウラの理由があった。それは強固な岩盤の中に造られた洞窟（トンネル）を破壊する新型兵器の実験だった。アフガンの洞窟と北朝鮮の核攻撃防止用トンネルは地形や岩盤の質の点で酷似している。実験はすでに終わっているのだ。
- * 11月5日は米国の中間選挙。共和党が勝つためには北朝鮮を軍事的に押さえ込むこと。「ブッシュは出先機関」と考えている世界支配を狙う連中の思惑もそこにある。彼らの最大の敵は中国。その中国が今回の事件で困りはてた。領事館前の強烈な映像が世界に配信されたからだ。「北朝鮮を潰すべし」という大義名分はできあがった。
- * 1月29日、ブッシュは一般教書で「イラク、イラン、北朝鮮は悪の枢軸（an axis of evil）」と断定した。これは「善悪」の悪ではなく「悪魔」という極めて宗教的な意味だ。「自由（人権）と民主主義を守る」が使命感の米国は「反キリスト教や共産主義を叩き潰すべし」が基本としてある。あの3つの国は、まさに「悪魔の国」なのだ。
- * 翌日、北朝鮮は反発した。「これは北朝鮮に対する宣戦布告だ」さらに「攻撃の選択権は米国にだけあるとは限らない」とも。これは田中外交の更迭の時期とも符合する。米国の圧力があつたのかどうか。今、米国世論は「8月から北朝鮮に核査察を実施すべし」だが、北朝鮮は「05年からなら実施してもよい」。今秋の危機は避けられない？
- * 6月に行われる不審船の引き上げの結果も重要なメルクマールになる。あれは明らかに自爆による沈没。が、海底が90mと浅すぎた。もっと深いところでやるべきだった。また、韓国に数万人規模で潜入している北朝鮮工作員の活動に対応するため、ロッテホテルで生物、化学兵器が使われたことを想定した大規模な訓練を実施している。
- * 「ユダヤ40年の法則」というのがある。歴史的にみて40年ごとに戦争を起こしているのがユダヤ。40年前の1967年6月にイスラエルはエルサレムを占領している。そのデンでいくと07年6月頃に第三次世界大戦が起こるかも？ そういう危機感は今日本人には皆無。が、「やられてから目を覚ます」のが日本人なのかもしれない。
- * ユダヤ人に対する姿勢はブッシュとクリントンとは大違い。シャロンに言ったブッシュの「占領地を返してやれ！」。この言葉を発したのは米国大統領の中では彼が最初だろう。パレスチナの自爆テロはこれからも止まない。エスカレートすればするほど、イスラエルへの国際世論は冷たくなる。観光客も行かなければ、投資もしなくなる。
- * 9.11テロで2つのビルが崩壊したことにより、ユダヤ資本の財産であったデータが消滅。以来、イスラエル経済もガタガタになった。4月末に発表した「官民の賃金凍結」がその証左だ。ユダヤに対する米国のビヘイビアが変わったことは間違いない。ともあれ、北朝鮮の内部崩壊の進行と共に、「朝鮮半島有事」の確率は高まってきた。